人ではなかなか手のでない値段である．こうゆうところで文字にするのは気が引けるが，正直言って大学の研究室と言う所は大変貧乏なところである．非常に限られた研究費で学生から教官まで，勉強し，研究している．本は買いたくても買えない，あるいは教官が自腹で買ってそれを研究室に置いてみんなで利用する，というのが当たり前のところである．そこで金井氏は全国のしかるべき研究室，標本庫にこれらの本を寄贈してきている．これはこれらの本が本当に利用されてこそ意味がある，という氏の哲学の実践であろう．第二の点は，出版社である．私のようなものから見れば到底採算ベースにあわないのではないかと思われる，このような出版物をよくぞ出してきたものである，と常々思っていた．その極め付けが今回の処置である．本書評の表題に掲げた後半の「日本植物分類学文献目録　目録・索引5　1887－1993」とあるのは前半の総目録がこれまでの全部の文献を集録したものであるのに対し，これはその中から既刊の4巻に付け加わったものだけを再編集して集録し，索引部分は総目録の「II（索引版）」と同じものを載せている．つまり，これまでの4巻の延長としての第5巻をわざわざ作ったものである．これはこれまでの4巻を既に持っているところが内容が重複する総目録を買わなくともこの巻だけを買えば良いようにとの配慮である．これは，売る方としてはなかなか，いやほとんど出来ないことである．これにはほとほと感心させられる．

それにしても，こうして改めて文献目録全巻を見ていると第1頁目にいつもある故阿部近一氏の著作が目に止まる．阿部氏が徳島県の植物の調査にいかに貢献してきたかが窺える．金井氏のこれまでの精力的な働きを以てしても集録出来なかった文献が今後も見つかって行くことだろうし，何よりも学問の世界は一時の休みもなく進んでいて，新しい文献が次々と発表されている．このように植物史の文献を最大もらさず集録して行く努力は金井氏を継いで誰かがやって行かなければならないことだとつくづく思う．そうして日本の植物史のデータベースがより完璧なものになり，植物学研究のためはもとより，日本の植物的自然とその変遷の記録としても，また植物研究者，愛好家などの「人間の歴史」として大きな意味を持つと思われる．（東北大学大学院理学研究科　鈴木三男）

□金井弘夫（編）：**地名レッドデータブック**　16＋2286＋194pp. B5判変形．1994．アボック社．¥92,000（税込み）．

1976～78年に出された「全国地名索引」（全国地名索引刊行会）全7巻，1981年の「日本地名索引」（アボック社）上下2巻，そして1993年の「新日本地名索引」（アボック社）全3巻に引き続く金井弘夫氏による地名索引の本である．「日本地名索引」は昭和20年代から40年代に国土地理院から出された20万分の一の地勢図にのっている地名を金井氏考案の地図座標（5万分の一の地形図を16に分割した区画）で表したものである．これは地名を拾った基図が粗に過ぎるきらいから，「新日本地名索引」ではぐんと細かくして2.5万分の一の地形図から38万件に及ぶ地名を拾うという，恐ろしいことを行った．そして，旧版で不十分であった点の改良が随分となされているが，その一番大きな点は地点座標を図幅番号を基にしたものから緯度・経度を分単位で表す方法に改めたことである．この改良によって地点データがそのまま世界的に使えるようになった．この新しい索引が植物地理学のみならず人文地理学を始め，地名を扱う必要のあるすべての研究分野や業種の人達にとって極めて有用なものとなったのである．「地名探し」を趣味としている人や推理小説家なども使っているんじゃないかと思ったりする．こうして地名索引が大きな実用性を持つようになると，本紙で大橋広好氏（69巻 p.60, 1994）が指摘しているように「古い地名」の索引の必要性が痛感されることになった．

金井氏はこれらの索引を氏自身の植物分布図作成のために開発してきたのだし，私たちもその目的に大変重宝しているのだが，標本庫に収蔵されている古い標本には当然のことながら当時の地名で産地が記されている．ところが，私は正確には知らないが，国土地理院が昭和40年代頃から20万分の一地勢図，5万分の一地形図の再編纂を順次手掛け，そして色刷の図幅が出されるようになった頃から，図幅が新しくなる度に載っている地名

がどんどん減って行ったように記憶している．それは全く新たに出され始めた2.5万分の一の地形図ではもっと徹底していたように思われる．大都市に始まった宅地，市街地，工場用地等の開発は地方都市や農村部まで広範に及び，その一方，山間部では廃村，離村が相次ぎ，そして，何よりも町村合併による新行政単位の発足と旧行政単位の消失があって，新たな地名が沢山生まれる一方，古くから受け継がれてきた地名が消失していった社会的背景がある．その結果，「新日本地名索引」では出てこない地名が少なからず目につく結果となってしまったようだ．これは大橋広好氏の指摘を待つまでもなく金井氏自身が痛感していて，このような「失われた地名の索引」の編集を「新日本地名索引」の編纂と同時進行させていたようで，この度，同じアボック社から「地名レッドデータブック」として出版されたわけである．

本書は1897年～1920年代（一部は戦後のものもある）に旧陸軍参謀本部陸地測量部が出した5万分の一陸測図にのっている地名を拾い，それを上記の「新日本地名索引」と比較し，後者に載っていない地名を「失われた地名」として収録したもので8万件あまりあり，まさに「レッドデータブック」である．ここで簡単に「両者を比較して後者に載っていない地名」と言ったが，これを電算機上で行うのは簡単なことではない．そのため「緯度経度で1分以内に同じ地名がある場合はその地名を生き残っているとするプログラム」やどれを「同等文字」とするか，などにおいて様々なアイデアや工夫が凝らされて初めて可能となったものである．システムは「新日本地名索引」と基本的に同じで，まず全国編と銘打って五十音順の読みによる索引と漢字による索引が中心部分をなす．この本ではそれに都道府県別の五十音順による索引もついている．そして漢字で索引するための助けとして字画索引と音訓索引が「漢字索引資料」としてついており，大変便利になっている．さらに「付録」というのがある．金井氏の地名索引や文献目録にはいつも「付録」がついている．それが図幅名と他のコード番号との対照表であったりして大変便利なものであるが，これら一つを作るにも発想を変えたアイデアとかなりの手間を要したことだろうと推察する．本書の場合は「地名関係順位表」というもので，漢字の地名の番付表があり，一位は「中村」の715件で，人の姓の場合は確か鈴木が一番で中村は2番だったと思うから，地名では中村が日本一と言うわけだ．中には「老人ホーム」や「東海自然歩道」というのがあって，これはちと違うんじゃないかと誰しも思うところだが，それをあえて削除しないところに金井氏の真骨頂があるというのは私の偏った見方だろうか．そのほか，都府県別の番付，失われた地名，残存している地名の番付などがあって，実に面白い．それにしても氏の「付録」は子供のころの月刊漫画誌のおまけを思い出させる面白味がある．

これまでの地名索引もそうであるし，植物分類学の文献目録でもそうであるが，金井氏自身がいつも言っているように，これらは決して「完成」された「完璧」なものではないのは事実である．しかし，それが不完全であることとこれらの索引が意味を持つことは別である．このような，編纂のために多大な手間と時間を要する仕事で完璧なものを求めていてはいつになっても成果を世に送り出すことが出来ず，その結果，だれもそれを利用する恩恵に浴することは出来ない．不十分，不完全であってもそれを世に問うことにより，それを新たなる出発点としてさらに完全なものを作り上げる段階に入ることが初めて可能になる．金井氏は国立科学博物館の退職をもってこれら索引誌からも「退職」を意図されているようだが，是非これらの「増補，完全版」の出版にもうひと肌脱いでもらいたい，というのが後進の願いである．

（東北大学大学院理学研究科　鈴木三男）